

チョコレートの効能

2月は「にっぽち」の緒戦月。2月と8月には商況の低迷する業種が多いが、不況期にはその程度が一層増す。日銀総裁が掲げている今年の第一の挑戦は「ニューノーマル」への移行(日本経団連評議員会での講演2009年12月24日)。景気が回復しても、元の水準には戻らないという別の表現にも聞こえる。

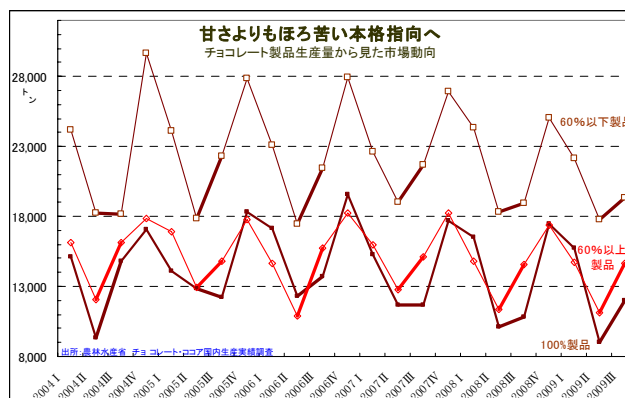
2月14日にはバレンタインデーを迎える。12日からは、恋愛オムニバス映画『バレンタインデー』も日米で同時公開される。多くの職場では、チョコレートを贈る日としてノーマルになってきたが、今年は日曜日。心身に多様な効用があるとされているチョコレート販売の動向は、景気動向を反映したものになるかも知れない。

チョコレートの物色行動は消費者だけには止どまらない。食品で世界3位のクラフト・フーズ(米)は、英国王室御用達のチョコレート菓子会社、キャドバリー(英)を買収しようとしている。キャドバリー側は提案価格が「企業価値を反映していない」として拒否していた。この敵対的買収案に対して、米国のチョコレート最大手であるハーシーが対抗提案も仕掛けた。この市場には魅力があるものようだ。欧州委員会は、ポーランドとルーマニアでのチョコレート事業売却を条件に、キャドバリー買収を承認した。市場低迷期には再編劇が生じるものだ。

企業買収の動きは、こうすればもっと儲かるという目算があるからだろう。不況期の「今年はバレンタインも“巣ごもり”“草食”傾向」(森永製菓 男と女のバレンタイン意識調査)と分析されている。この動向は足元の景況観を反映している。地域的な差異をも表現している可能性さえある。チョコレート消費から見た世相は、ニューノーマルへの移行期にふさわしい、気迷い気分を反映している。

供給側の期待は高い

バレンタインデーはチョコレート小売業界にとって、年間の大イベントだ。当日

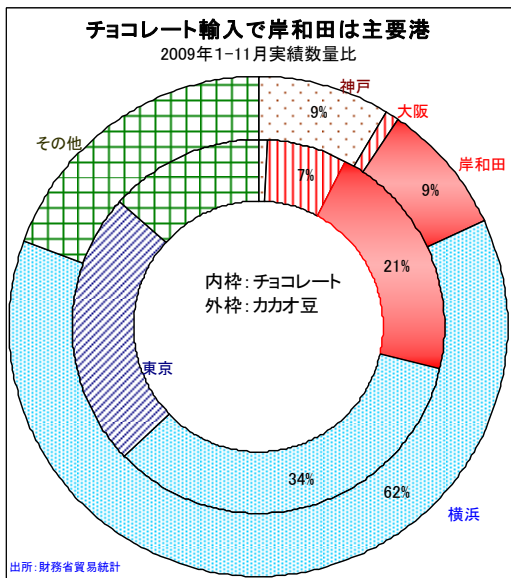


が日曜日に当たった事例は1999年、1993年、1988年、1982年などにある。バレンタインデーが日曜日の場合、1993年を除いてチョコレート商戦は伸び悩んだ。その、不利な日曜バレンタインデーの今年、供給側は期待度を強めている。

全国ベースでの生産量で比較すると第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期への増加が急だからだ。生産量も昨年同期より多い。特に、チョコレート純度が高い商品での生産量回復度が高い。一方で、含有率60%未満の菓子製品は増加が鈍い。

多くの告白は岸和田から始まる

チョコレートの原料はカカオ豆。ガーナからの輸入が約7割を占め、2位のベネ

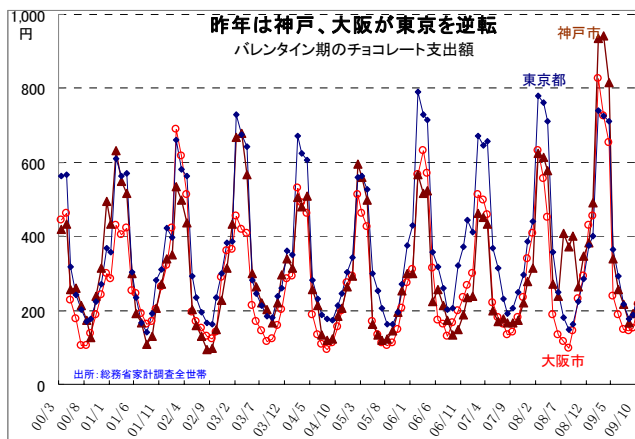


ズエラは1割程度。輸入港の主力は横浜と神戸(阪神港)および岸和田(阪南港)だ。岸和田は神戸よりも取扱量でやや上回る水準にある。チョコレートの状態になったものの輸入は中国からが全体の2割弱、これにベルギー、米国、フランスが続いている。輸入港の主力は横浜、東京だがこれに岸和田、神戸が続いている。後背地に洋菓子産業を抱えている地域が優位に立っている格好だ。岸和田は、カカオ豆でもチョコ

レートでも輸入の主要港となっている。港湾規模から見れば重要な取扱産品に数えられる。バレンタインデーには岸和田港が重要な役割を担っている。

不況期に支出を増やす阪神

需要側から見たチョコレートへの支出実額は、2月が最大になる。都市別の全世



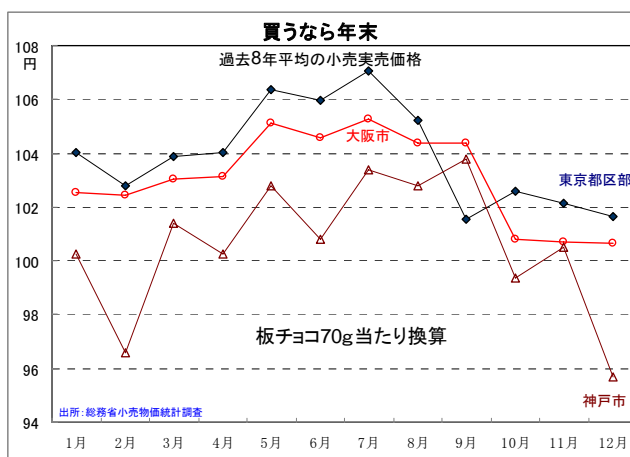
帯比較で支出額が最も大きいのは東京都(区部)。ただ、2月単月の支出額では昨年の場合、神戸市が東京都を上回った。大阪市も東京都より多かった。それ以前に神戸市が東京都や大阪市を上回ったのは2001年と2005年。大阪

市が両都市を抑えて首位だったのは2002年だ。前回の第14景気循環での景気基準日付の底として設定されているのは兵庫県が2001年、大阪府が2002年(大阪府立産業開発

研究所、兵庫県景気動向検討会)。もう一つの2005年、日銀総裁の年頭談話は「デフレ脱却来年度にも懐疑的」だった。阪神間の都市では、不況期に、チョコレート購入額を増やす傾向が観察される。

平均すれば、2月は安いチョコレート

ただ、2月の店頭商戦には厳しさも伴っている。チョコレート小売価格(70g板チョコ換算)を月別で見ると、2月の価格は、12月に次いで安い月に当たる。概ね、下旬には投げ売りが出てしま

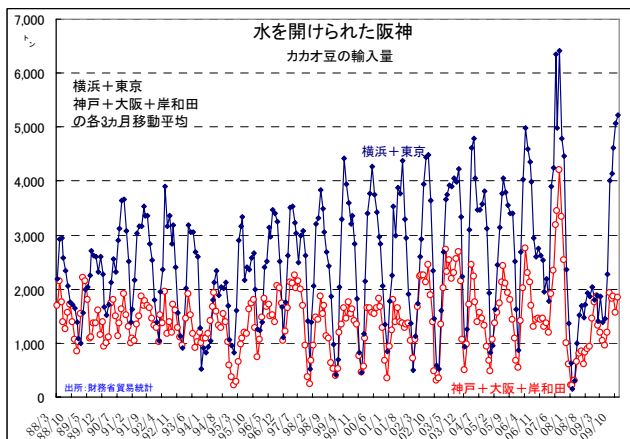


う程、価格変動も大きい月に当たる。過去8年平均で見た年間の傾向としては、12月が最も安く、1月には上昇し、2月に入れば下がる。夏場にかけては安定的に上昇して行く。安く買っておこうとする消費者にとって、チョコレ

ートは年末に買って置くのが得策だが、現実には価格が戻る月になってからの当用買いを繰り返している。

カカオ豆輸入量の回復は東高西低

横浜・東京の動向と比較すれば、阪神・阪南地域のカカオ豆輸入には停滞感がある。原料高騰が事業構造の見直しを迫ってもいるからだろう。カカオ豆の輸入量は



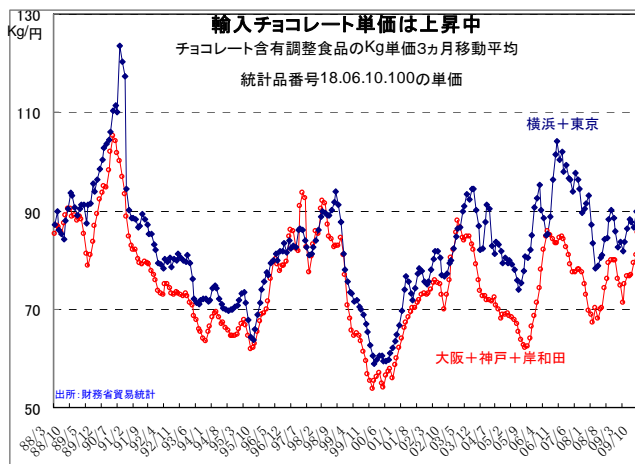
2008年に大きく減少したが、2009年1～11月では横浜、東京が大きく回復を見せた。しかし神戸、岸和田での回復は鈍い。カカオ豆の価格は2010年1月2日現在で3,427.74ドル/トン(ICO=国際ココア機構)だった。1年前の1月

2日は2,540.40ドルだったので、年間上昇率は35%。2年前の1月2日価格比では61%も高い。それ以前は2,000ドル以下で推移していた。原材料価格の高騰は、仕

入れ側の姿勢に影響している。

製品の輸入単価、東西で横並びへ

チョコレート原料価格の上昇は、輸入チョコレート製品価格動向とも連動している。

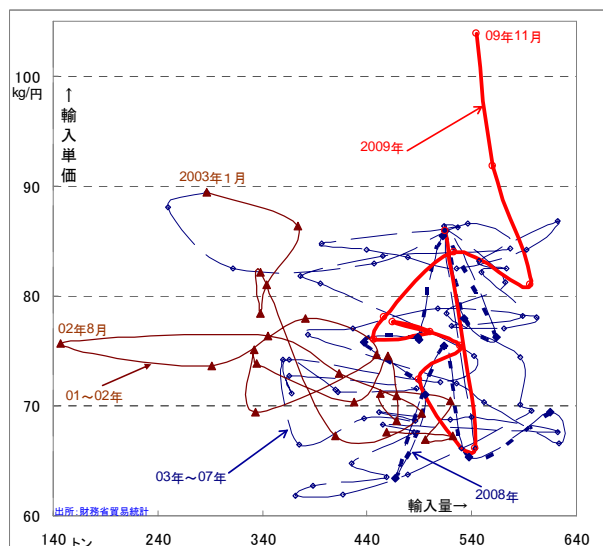


輸入単価は2000年を底に、前回の景気拡大期間中を通じて上昇した。同じ期間、大阪+神戸+岸和田の平均輸入価格は横浜+東京の平均を下回って推移してきた。ところが、昨年11月にはその差が急速に縮まった。動向の変動は、

内需拡大に確信が持てない中で、事業者にはどんな商戦を展開するべきかの判断が容易ではない状態になってきていることを暗示している。

輸入チョコレート動向は強気転換

この動向を数量との相関で見ると、事業者が強気判断に転じた可能性がある。昨



年8月までは数量、単価ともにそれ以前の5年間の変動幅に収まっていた。しかし、9月以降は需要期を睨んで高水準の量を高い価格で調達する動きに転じた。カカオ豆の調達は抑制気味だが、チョコレートは積極姿勢に転じた。不況下でのバレンタイン・サンデーを前に、強気感を抱きつつもニューノ

ーマル水準の瀬踏が始まっている。

(神保)

本資料は、参考情報の提供を目的としたものです。有価証券の売買にかかわる助言・募集や、いかなる契約の締結や解約をも勧誘するものではありません。記載内容は、2010年1月14日までに新聞その他の情報メディアによる報道、民・官調査機関による各種刊行物、公表資料やインターネットホームページ等で公開された資料と、執筆者が独自に調査した結果に基づいて作成していますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。主張や結論は、作成時点での執筆者の判断によるもので、資料発行/配布機関の公式見解を表明するものではありません。掲載情報を利用したことによって生じる、いかなる支出や障害についても、その責任を負いかねます。見解は、その後の状況に応じて予告なく変更されます。本資料の既刊分は池田銀行のインターネットホームページ <http://www.ikedabank.co.jp/h/h1001.html> からご覧頂くことができます。

より詳細なデータ、記載内容に対するお問い合わせは、池田銀行東京事務所 03-3284-1253 / 神保 敬明、までお願いします。